住む人・使う人の立場にたった アーバン・ルネッサンスはありうるか

建築家　高橋　偉之

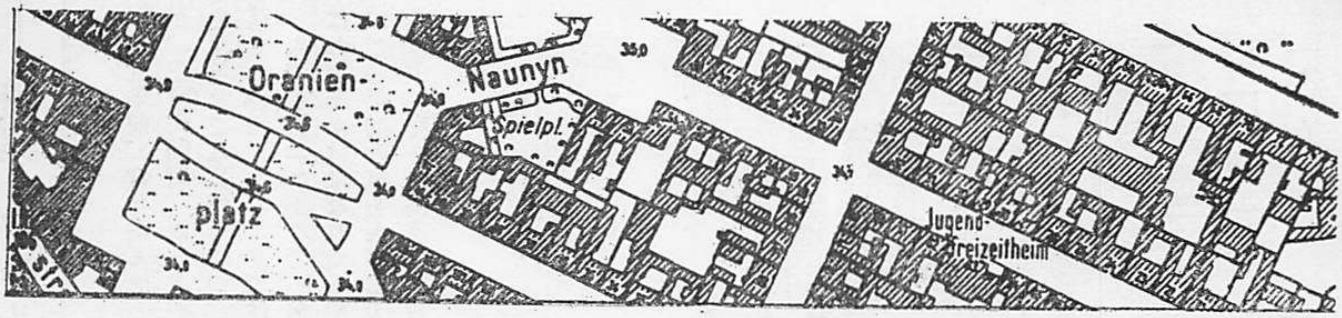
建築界の混迷が、ますます危機的な様相にたちいたっているようだ。

思えば、もう二〇年以上も前のことであるが、かの「高度経済成長」時代に、私たちは「資本の論理」に押されて、日本の国土、自然やまちの破壊に参加させられた。その結果住民から大きな不信を受けたのは衆知である。

そして爾来、建築界の危機ともいえる状況の中で、多くの建築家は自らの職能のあり方に強い反省を加え、住民の立場にたった実践を意識的にすすめてきた。住民の主体的な力の高揚とも相まって一時期「住む人・使う人の立場にたち地域に根ざした」建築活動の前途は大いに明るい、と楽観的にとらえられたこともあることはあった。

けれども七〇年代の後半から、経済の「低成長」期に入ったといわれ、いまや「構造的危機」ともいわれるような、長期の深刻な不況期のただなかで、建築界は深刻な重圧感におおわれている。建築界のすべての分野で生きのびるために、ダンピングをしてでも仕事にありつこうとする、深刻なあがきが見られる。全体的な不況と同時に、住民の主体的な力の高まりにもかげりが見えてきている。こと時に呼応して再び「資本の論理」を優先した「アーバン・ルネッサンス」と称する方向が、国の政策としてとなえられるようになってもきているし民活の声も大きく聞こえてきている。

そのなかで、「住む人・使う人の立場にたち……」という理念は、もちろん正しいが、現実の仕事の中では（あるいは自分の職場では）、容易にそれはつらぬけないとか、リフォームやマンションのメンテナンスやコープ住宅など地域住民のニーズに応える新しい仕事も、大手企業の進出に押されぎみで容易に実現しないとか、個々に理念をつらぬきながら仕事をしていくのが精一杯で、それらの経験を交流し、蓄積し、さらに理論化して



先へすすむという積極さがなかなか出せない、などというなやみが多くの良心的な建築家技術者の問題になっている。

全般的にも私たちの建築の仕事が先細りぎみであり、理念にもとづいた活動に積極性を発揮しにくくなっているのは事実であることは否めない。

現在の建築界の苦しさは、本誌一月号での三村浩史氏の指摘の通り「自分達の仕事を評価し、社会的な地位を高めてくれる民衆という現代のパトロンの支持」を、全体として得ていないところにもあるのではないか。

しかし、住み手、使い手と手を組んで施設づくり、まちづくりにとりくみ、地域住民やユーザーの相談に応えながら、自らの生きぬく方途を確立し、これからのすすむべき道に明るい展望と確信をもつ建築家技術者の数も、今では決して少なくはないことに自信をもちたい。

あらためて言うまでもなく、「民衆という現代のパトロン」の支持を得えないアーバン・ルネッサンスはあり得ない。住民主体のまちづくりは、建築家技術者のこのような活動を地道に積み上げていく以外に途がないことは明らかであろう。

建築界のそれぞれの分野に、日夜、深い井戸にただ石を放っているような、反響のない努力にむなしい思いをいだいている建築家・技術者は少なくなかろう。そこであらためて建築界全体の中での自らの位置をとらえ直し、わずかな努力を仲間とともに集積していけば、必ず、豊かな環境、豊かな生活空間を望む民衆の支持を得ることができ、住民主体のまちづくりの前途は洋々たるものとなるにちがいない。

必要なことは（いつも結論は同じだが）確信をもって、そのような同行の士をひとりでも多くふやすことであろう。

（平松建築設計事務所）